

九

「御勉強ですか」と女が云う。部屋に帰った余は、三脚几に縛りつけた、書物の一冊を抽いて読んでいた。

「御這入りなさい。ちっとも構いません」

女は遠慮する景色もなく、つかつかと這入る。くすんだ半襟ハンエリの中から、恰好カッコウのいい頸クビの色が、あざやかに、^ス抽き出ている。女が余の前に坐った時、この頸とこの半襟の対照が第一番に眼についた。

「西洋の本ですか、むずかしい事が書いてあるでしょうね」

「なあに」

「じゃ何が書いてあるんです」

「そうですね。実はわたしにも、よく分らないんです」

「ホホホホ。それで御勉強なの」

「勉強じゃありません。ただ机の上へ、こう開けて、開いた所をいい加減に読んでるんです」

「それで面白いんですか」

「それが面白いんです」

「なぜ？」

「なぜって、小説なんか、そうして読む方が面白いです」

「よっぽど変っていらっしゃるのね」

「ええ、ちょっと変わってます」

「初から読んじゃ、どうして悪るいでしょう」

「初から読まなけりゃならないとすると、しまいまで読まなけりゃならない訳になり
ましょう」

「妙な理窟だ事。しまいまで読んだっていいじゃありませんか」

「無論わるくは、ありませんよ。筋を読む気なら、わたしだって、そうします」

「筋を読まなけりゃ何を読むんです。筋のほかに何か読むものがありますか」

余は、やはり女だなと思った。多少試験してやる気になる。

「あなたは小説が好きですか」

「私が？」と句を切った女は、あとから「そうですねえ」と判然^{ハッキリ}しない返事をした。

あまり好きでもなさそうだ。

「好きだか、嫌^{キライ}だか自分にも解らないんじゃないですか」

「小説なんか読んだって、読まなくたって……」

と眼中にはまるで小説の存在を認めていない。

「それじゃ、初から読んだって、しまいから読んだって、いい加減な所をいい加減に
読んだって、いい訳じゃありませんか。あなたのようにそう不思議がらないでもいい
でしょう」

「だって、あなたと私とは違いますもの」

「どこが？」と余は女の眼の中を見詰めた。試験をするのはここだと思ったが、女の眸^{ヒトミ}
は少しも動かない。

「ホホホホ解りませんか」

「しかし若いうちは随分御読みなすったろう」余は一本道で押し合うのをやめにして、ちょっと裏へ廻った。

「今でも若いつもりですよ。可哀想に」放した鷹^{タカ}はまたそれかかる。すこしも油断がならん。

「そんな事が男の前で云えれば、もう年寄のうちですよ」と、やっと引き戻した。

「そう云うあなたも随分の御年じゃあ、ありませんか。そんなに年をとっても、やっぱり、惚^ホれたの、腫^ハれたの、にきびが出来たのってえ事が面白いんですか」

「ええ、面白いんです、死ぬまで面白いんです」

「おやそう。それだから画工^{エカキ}なんぞになれるんですね」

「全くです。画工だから、小説なんか初からしまいまで読む必要はないんです。けれども、どこを読んでも面白いのです。あなたと話をするのも面白い。ここへ逗留^{トウリュウ}しているうちは毎日話をしたいくらいです。何ならあなたに惚^ホれ込んでもいい。そうなるとなお面白い。しかしいくら惚^ホれてもあなたと夫婦になる必要はないんです。惚^ホれて夫婦になる必要があるうちは、小説を初からしまいまで読む必要があるんです」

「すると不人情^{フニンジョウ}な惚^ホれ方をするのが画工^{エカキ}なんですね」

「不人情じゃありません。非人情な惚^ホれ方をするんです。小説も非人情で読むから、筋なんかどうでもいいんです。こうして、御籤^{オミクジ}を引くように、ぱつと開^アけて、開いた所を、漫然と読んでるのが面白いんです」

「なるほど面白そうね。じゃ、今あなたが読んでいらっしゃる所を、少し話してちょうだい。どんな面白い事が出てくるか伺いたいから」

「話しちゃ駄目です。画^エだって話にしちゃ一文の価値^{ネウチ}もなくなるじゃありませんか」

「ホホホそれじゃ読んで下さい」

「英語ですか」

「いいえ日本語で」

「英語を日本語で読むのはつらいな」

「いいじゃありませんか、非人情で」

これも一興^{イツキョウ}だろうと思ったから、余は女の乞^{コイ}に応じて、例の書物をぽつりぽつりと日本語で読み出した。もし世界に非人情な読み方があるとすればまさにこれである。聴く女ももとより非人情で聴いている。

「情^{ナサ}けの風が女から吹く。声から、眼から、肌^{ハダエ}から吹く。男に扶^{タス}けられて舳^{トモ}に行く女は、夕暮のヴェニスを眺むるためか、扶くる男はわが脈に稲妻の血を走らすためか。

——非人情だから、いい加減ですよ。ところどころ脱けるかも知れません」 ※舳^{トモ}＝船首

「よござんすとも。御都合次第で、御足^{オタ}しなすっても構いません」

「女は男とならんで舷^{フナバタ}に倚^ヨる。二人の隔たりは、風に吹かるるリボンの幅よりも狭い。女は男と共にヴェニスに去らばと云う。ヴェニスなるドウジ^{デンロウ}の殿楼は今第二の日没のごとく、薄赤く消えて行く。……」 ※舷^{フナバタ}＝船縁^{フナベリ}

「ドージとは何です」

「何だって構やしません。昔しヴェニスを支配した人間の名ですよ。何代つづいたものですかね。その御殿が今でもヴェニスに残ってるんです」

「それでその男と女と云うのは誰の事なんでしょう」

「誰だか、わたしにも分らないんだ。それだから面白いのですよ。今までの関係なんかどうでもいいでさあ。ただあなたとわたしのように、こういっしょにいるところなんで、その場限りで面白味があるでしょう」

「そんなものですかね。何だか船の中のようですね」

「船でも岡でも、かいてある通りでいいんです。なぜと聞き出すと探偵になってしま
うです」

「ホホホホじゃ聴きますまい」

「普通の小説はみんな探偵が発明したものですよ。非人情なところがないから、ちっ
とも ^{オモムキ} 趣がない」

「じゃ非人情の続きを伺いましょう。それから？」

「ヴェニスは沈みつつ、沈みつつ、ただ空に引く ^{イチマツ} 一抹の淡き線となる。線は切れる。
切れて点となる。 ^{トンボダマ} 蛋白石の空のなかに ^{マル} 円き柱が、ここ、かしこと立つ。ついには最も
高く ^{ソビ} 聳えたる ^{シュロウ} 鐘楼が沈む。沈んだと女が云う。ヴェニスを去る女の心は空行く風のご
とく自由である。されど隠れたるヴェニスは、再び帰らねばならぬ女の心に ^{キセツ} 羈縛の苦
しみを与う。 ※羈縛=つなぎとめられること

男と女は暗き湾の ^{カタ} 方に眼を注ぐ。星は次第に増す。柔らかに揺ぐ海は泡を ^{ソツ} 濺がず。

※濺ぐ=飛び散る

男は女の手を把る。鳴りやまぬ^{ユヅル}弦^コを握った心地^{ココチ}である。……」

「あんまり非人情でもないようですね」

「なにこれが非人情的に聞けるのですよ。しかし厭^{イヤ}なら少々略しましょうか」

「なに私は大丈夫ですよ」

「わたしは、あなたよりなお大丈夫です。——それからと、ええと、少しく[△]六[△]ずかしくなつて来たな。どうも訳し——いや読みにくい」

「読みにくければ、御略^{オリヤク}しなさい」

「ええ、いい加減にやりましょう。——この^{ヒトヨ}一夜と女が云う。一夜？ と男がきく。

一と限るはつれなし、^{イクヨ}幾夜を重ねてこそと云う」

「女が云うんですか、男が云うんですか」

「男が云うんですよ。何でも女がヴェニスへ帰りたくないのでしょう。それで男が慰める^{コトバ}語^{コトバ}なんです。——真夜中の^{カンバン}甲板に帆綱を枕にして横わりたる、男の記憶には、かの^{ヨコタ}瞬間、熱き一滴の血に似たる瞬間、女の手を^{シカ}確と把りたる瞬間が^{オオナミ}大濤のごとくに揺れる。男は黒き夜を見上げながら、強いられたる結婚の淵より、是非に女を救い出さんと^ト思い定めた。かく思い定めて男は眼を閉ずる。——」

「女は？」

「女は路に迷いながら、いずこに迷えるかを知らぬ^{サマ}様である。攫^{サラ}われて空行く人のごとく、ただ不可思議の千万無量——あとがちょっと読みにくいですよ。どうも句にならない。

——ただ不可思議の千万無量——何か動詞はないでしょうか」

「動詞なんぞいるものですか、それで沢山です」

「え？」

轟と音がして山の樹がことごとく鳴る。思わず顔を見合わす途端に、机の上の一輪挿に活けた、椿がふらふらと揺れる。

「地震！」と小声で叫んだ女は、膝を崩して余の机に寄りかかる。御互の身軀がすれすれに動く。キキーと鋭どい羽搏をして一羽の雉子が藪の中から飛び出す。

「雉子が」と余は窓の外を見て云う。

「どこに」と女は崩した、からだを擦寄せる。余の顔と女の顔が触れぬばかりに近づく。細い鼻の穴から出る女の呼吸が余の髭にさわった。

「非人情ですよ」と女はたちまち坐住居を正しながら屹と云う。

「無論」と言下に余は答えた。

岩の凹みに湛えた春の水が、驚ろいて、のたりのたりと鈍く揺れている。地盤の響きに、満泓の波が底から動くのだから、表面が不規則に曲線を描くのみで、砕けた部分はどこにもない。円満に動くと言語があるとすれば、こんな場合に用いられるのだろう。落ちついて影を蘸していた山桜が、水と共に、延びたり縮んだり、曲がったり、くねったりする。しかしどう変化してもやはり明らかに桜の姿を保っているところが非常に面白い。

「こいつは愉快だ。奇麗で、変化があつて。こう云う風に動かなくっちゃ面白くない」

「人間もそう云う風にさえ動いていれば、いくら動いても大丈夫ですね」

「非人情でなくっちゃ、こうは動けませんよ」

「ホホホホ大変非人情が御好きだこと」

「あなた、だって嫌キライな方じゃありますまい。昨日の振袖なんか……」と言いかけると、

「何か御褒美ゴホウビをちょうだい」と女は急に甘えるように云った。

「なぜです」

「見たいとおっしゃったから、わざわざ、見せて上げたんじゃないですか」

「わたしがですか」

「山越ヤマゴエをなされた画エの先生が、茶店の婆さんにわざわざ御頼みになったそうで御座います」

余は何と答えてよいやらちょっと挨拶アイサツが出なかった。女はすかさず、

「そんな忘れっぽい人に、いくら実ジツをつくしても駄目ですわねえ」と嘲アザけるごとく、恨ウラむがごとく、また真向マッコウから切りつけるがごとく二の矢をついだ。だんだん旗色ハタイロがわるくなるが、どこで盛り返したのか、いったん機先を制せられると、なかなか隙スキを見出しにくい。

「じゃ昨夕ユウベの風呂場も、全く御親切からなんですね」と際キワどいところでようやく立て直す。

女は黙っている。

「どうも済みません。御礼に何を上げましょう」と出来るだけ先へ出て置く。いくら出ても何の利目キキメもなかった。女は何喰わぬ顔で大徹和尚の額をやがて、眺めている。

チクエイ カイヲハラツテ チリウゴカズ
「竹影払階塵不動」

※竹の影が箒のようになって階段を掃いているが、塵はまったく動かない。何事にも動じない不動の心をもちたい。

と口のうちに読み了^{オワ}って、また余の方へ向き直ったが、急に思い出したように、

「何ですって」

と、わざと大きな声で聞いた。その手は喰わない。

「その坊主にさっき逢いましたよ」と地震に揺れた池の水のように円満な動き方をし
て見せる。

「観海寺^{カンカイジ}の和尚ですか。肥^{フト}ってるでしょう」

「西洋画^{カラカミ}で唐紙をかいてくれって、云いましたよ。禅坊さんなんてものは随分^{ワケ}訳のわ
からない事を云いますね」

「それだから、あんなに肥れるんでしょう」

「それから、もう一人若い人に逢いましたよ。……」

「久一^{キュウイチ}でしょう」

「ええ久一君です」

「よく御存じです事」

「なに久一君だけ知ってるんです。そのほかには何にも知りゃしません。口を聞くの
が嫌^{キライ}な人ですね」

「なに、遠慮しているんです。まだ小供ですから……」

「小供って、あなたと同じくらいじゃありませんか」

「ホホホホそうですか。あれは私^{ワタク}しの従弟^{イトコ}ですが、今度戦地へ行くので、暇乞^{イマゴイ}に来た
のです」

「ここに留^{トマ}って、いるんですか」

「いいえ、兄の家におります」

「じゃ、わざわざ御茶を飲みに来た訳ですね」

「御茶より御白湯の方が好なんですよ。父がよせばいいのに、呼ぶものですから。麻痺が切れて困ったでしょう。私がおれば中途から帰してやったんですが……」

「あなたはどこへいらしたんです。和尚が聞いていましたぜ、また一人散歩かって」

「ええ鏡の池の方を廻って来ました」

「その鏡の池へ、わたしも行きたいんだが……」

「行って御覧なさい」

「画にかくに好い所ですか」

「身を投げるに好い所です」

「身はまだなかなか投げないつもりです」

「私は近々投げるかも知れません」

余りに女としては思い切った冗談だから、余はふと顔を上げた。女は存外たしかである。

「私が身を投げて浮いているところを——苦しんで浮いてるところじゃないんです——やすやすと往生して浮いているところを——綺麗な画にかいて下さい」

「え？」

「驚ろいた、驚ろいた、驚ろいたでしょう」

女はすらりと立ち上る。三歩にして尽くる部屋の入口を出るとき、顧みてにこりと笑った。茫然たる事多時。

十

鏡が池へ来て見る。観海寺の裏道の、杉の間から谷へ降りて、向うの山へ登らぬうちに、路は二股に岐れて、おのずから鏡が池の周囲となる。池の縁には熊笹が多い。ある所は、左右から生い重なって、ほとんど音を立てずには通れない。木の間から見ると、池の水は見えるが、どこで始まって、どこで終るか一応廻った上でないと見当がつかぬ。あるいて見ると存外小さい。三丁ほどよりあるまい。ただ非常に不規則な形ちで、ところどころに岩が自然のまま水際に横わっている。縁の高さも、池の形の名状しがたいように、波を打って、色々な起伏を不規則に連ねている。

池をめぐりては雑木が多い。何百本あるか勘定がし切れぬ。中には、まだ春の芽を吹いておらんのがある。割合に枝の繁^コまない所は、依然として、うららかな春の日を受けて、萌^モえ出^{シタグサ}でた下草さえある。壺^{ツボスミレ}堇の淡き影が、ちらりちらりとその間に見える。

日本の堇は眠っている感じである。「天来^{テンライ}の奇想のように」、と形容した西人^{セイジン}の句はどうていあてはまるまい。こう思う途端に余の足はとまった。足がとまれば、厭^{イヤ}になるまでそこにいる。いられるのは、幸福な人である。東京でそんな事をすれば、すぐ電車に引き殺される。電車が殺さなければ巡査が追い立てる。都会は太平の民を乞食と間違えて、掬^{スリ}摸の親分たる探偵に高い月俸を払う所である。 ※掬摸＝明治維新とな

り、人口が東京に集中、京阪の掬摸が東京に集まった。当時警察が情報屋として利用することがあった。

余は草を茵シトネに太平の尻オロをそろりと卸した。ここならば、五六日こうしたなり動かないでも、誰も苦情を持ち出す氣遣キヅカイはない。自然のありがたいところはここにある。いざとなると容赦も未練もない代りには、人に因ヨって取り扱をかえるような軽薄な態度はすこしも見せない。岩崎や三井を眼中に置かぬものは、いくらでもいる。冷然として古今帝王の權威フウバギョウを風馬牛フウバギョウし得るものは自然のみであろう。自然の徳は高く塵界を超越して、対絶の平等觀ムヘンサイを無辺際ムヘンサイに樹立している。天下の羣小グンショウを魔サシマネいで、いたずらにタイモンの憤りを招くよりは、蘭エンを九畹マに滋ケイき、蕙ケイを百畦ケイに樹えて、独りその裏ウチに起臥キガする方が遙かに得策である。

※風馬牛＝互いに無関心＝無視する ※無辺際＝無限 ※羣小＝多くの取るに足りないもの

※魔く＝呼び寄せる ※タイモン＝シェイクスピアの戯曲の主人公、人間嫌い

※畹＝中国の面積の単位(1畹＝30畝＝2ha) ※蕙＝ラン科のシラン ※畦＝あぜ

余は公平と云い無私ムシと云う。さほど大事なものならば、日に千人の小賊リクを戮マンボして、満圃マンボの草花を彼らの屍シカバネに培養ツチカうがよかろう。

何だか考カンガエが理リに落ちていっこうつまらなくなつた。こんな中学程度の觀想カンソウを練りにわざわざ、鏡が池まで来はせぬ。袂タメトから煙草を出して、寸燐マツチをシュッと擦スる。手応テゴタエはあつたが火は見えない。敷島のさきに付けて吸ってみると、鼻から煙が出た。なるほど、吸ったんだなとようやく気がついた。寸燐は短かい草のなかで、しばらく雨竜アマリョウのような細い煙りを吐いて、すぐ寂滅ジャクメツした。席をずらせてだんだん水際まで出て見る。

余が茵シトネは天然に池のなかに、ながれ込んで、足を浸ヒタせば生温ナマヌルい水につくかも知れぬと云う間際マギワで、とまる。水を覗いて見る。

眼の届く所はさまで深そうにもない。底には細長い水草が、往生して沈んでいる。

余は往生と云うよりほかに形容すべき言葉を知らぬ。岡の^{ススキ}薄なら^{ナビ}靡く事を知っている。

藻の草ならば誘う波の情けを待つ。百年待っても動きそうもない、水の底に沈められ

たこの水草は、動くべきすべての姿勢を^{トノ}調べて、朝な夕なに、^{ナフ}弄らるる期を、待ち暮

らし、待ち明かし、^{イクヨ}幾代の^{オモイ}思を茎の先に^コ籠めながら、今に至るまでついに動き得ずに、

また死に切れずに、生きているらしい。

余は立ち上がって、草の中から、手頃の石を二つ拾って来る。^{クドク}功德になると思った

から、眼の先へ、一つ^{ホウ}抛り込んでやる。ぶくぶくと^{アフ}泡が二つ

浮いて、すぐ消えた。すぐ消えた、すぐ消えた、余は心のうちで繰り返す。すかし

て見ると、^{ミクキ}三茎ほどの長い髪が、^{モノウゲ}慵に揺れかかっている。見つかつてはと云わぬば

かりに、濁った水が底の方から隠しに来る。南無阿弥陀仏。

今度は思い切って、懸命に^{マンナカ}真中へなげる。ぽかんと^{カス}幽かに音がした。静かなるもの

は決して取り合わない。もう^ナ抛げる気も無くなった。絵の具箱と帽子を置いたまま右手へ廻る。

二間余りを^{ツマサキア}爪先上がりに登る。頭の上には大きな^キ樹がかぶさって、^{カラダ}身体が急に寒く

なる。向う岸の暗い所に椿が咲いている。椿の葉は緑が深すぎて、昼見ても、^{ヒナタ}日向で

見ても、軽快な感じはない。ことにこの椿は^{イワカド}岩角を、奥へ^{トオノ}二三間遠退いて、花がなけ

れば、何があるか気のつかない所に^{シンカン}森閑として、かたまっている。その花が！ 一日

勘定しても無論勘定し切れぬほど多い。しかし眼がつけば是非勘定したくなるほど鮮

かである。ただ鮮かと云うばかりで、いっこう陽気な感じがない。ぱっと燃え立つよ

うで、思わず、気を奪^トられた、後は何だか凄くなる。あれほど人を欺^{ダマ}す花はない。余は深山椿^{ミヤマツバキ}を見るたびにいつでも妖女^{ヨウジョ}の姿を連想する。黒い眼で人を釣り寄せて、しらぬ間に、嫣然^{エンゼン}たる毒を血管に吹く。 ※嫣然^{エンゼン}＝美人がにっこりとほほ笑むさま

欺^{アザム}かれたと悟った頃はすでに遅い。向う側の椿が眼^イに入った時、余は、ええ、見なければよかったと思った。あの花の色はただの赤ではない。眼^{サマ}を醒すほどの派出やかさの奥に、言うに言われぬ沈んだ調子を持っている。

悄然^{ショウゼン}として萎^{シオ}れる雨^{ウチュウ}中の梨花^{リカ}には、ただ憐れな感じがする。 ※悄然^{ショウゼン}として＝しおれている

冷やかに艶^{エン}なる月下^{ゲツカ}の海棠^{カイドウ}には、ただ愛らしい気持ち^{ヨソオ}がする。椿の沈んでいるのは全く違う。黒ずんだ、毒気のある、恐ろし味^ミを帯びた調子である。この調子を底^ミに持って、上部^{ウワベ}はどこまでも派出^{ヨソオ}に装^{サマ}っている。しかも人に媚^コぶる態^{サマ}もなければ、ことさらに人を招く様子も見えぬ。ぽっと咲き、ぽたりと落ち、ぽたりと落ち、ぽっと咲いて、幾百年^{セイソウ}の星霜^{セイソウ}を、人目^{ヒトメ}にかからぬ山陰^{ヤマカゲ}に落ちつき払^{ハラ}って暮らしている。ただ一^{ヒトメ}眼見たが最後！ 見た人は彼女の魔力^{コンリンザイ}から金輪際^{ノガ}、免^{ノガ}るる事は出来ない。あの色はただの赤ではない。屠^{ホフ}られたる囚人^{オノ}の血^ヒが、自^{オノ}ずから人の眼^ヒを惹^ヒいて、自^{オノ}から人の心^{ココロ}を不快にするごとく一種異様な赤である。

見ていると、ぽたり赤い奴^{やつ}が水の上に落ちた。静かな春に動いたものはただこの一輪である。しばらくするとまたぽたり落ちた。あの花は決して散らない。崩れるよりも、かたまつたまま枝を離れる。枝を離れるときは一度に離れるから、未練のないように見えるが、落ちてもかたまっているところは、何となく毒々しい。またぽたり落ちる。ああやって落ちているうちに、池の水が赤くなるだろうと考えた。花が静かに

浮いている^{アタリ}辺は今でも少々赤いような気がする。また落ちた。地の上へ落ちたのか、水の上へ落ちたのか、区別がつかぬくらい静かに浮く。また落ちる。あれが沈む事があるだろうかと思う。年々落ち尽す幾万輪の椿は、水につかって、色が溶け出して、腐って泥になって、ようやく底に沈むのかしらん。幾千年の後にはこの古池が、人の知らぬ^マ間に、落ちた椿のために、埋^{ウス}もれて、元の^{ヒラチ}平地に戻るかも知れぬ。また一つ大きいのが血を塗った、^{ヒトダマ}人魂のように落ちる。また落ちる。ぽたりぽたりと落ちる。際限なく落ちる。

こんな所へ美しい女の浮いているところをかいたら、どうだろうと思ひながら、元の所へ帰って、また煙草を吞んで、ぼんやり考え込む。温泉場の^{ユバ}御那美^{オナミ}さんが昨日冗談に云った言葉が、うねりを打って、記憶のうちに寄せてくる。心は^{オオナミ}大浪にのる一枚の^{イタゴ}板子のように揺れる。あの顔を^{タネ}種にして、あの椿の下に浮かせて、上から椿を幾輪も落とす。椿が^{トコシナ}長えに落ちて、女が^{トコシナ}長えに水に浮いている感じをあらわしたいが、それが^エ画でかけるだろうか。かのラオコーンには——ラオコーンなどはどうでも構わない。原理に^{ソム}背いても、背かなくっても、そう云う心持ちさえ出ればいい。

※ラオコーン＝ギリシア神話の人物。トロイ王の義兄弟アンテノルの息子。不敬を働き、神を怒らせた。

しかし人間を離れないで人間以上の永久と云う感じを出すのは容易な事ではない。第一顔に困る。あの顔を借りるにしても、あの表情では駄目だ。苦痛が勝ってはすべてを打ち壊わしてしまう。と云ってむやみに気楽ではな^{イッソ}お困る。一層ほかの顔にしては、どうだろう。あれか、これかと指を折って見るが、どうも^{オモフ}思しくない。やはり御那美さんの顔が一番似合うようだ。しかし何だか物足りない。物足りない^{オモフ}とまでは気がつ

くが、どこが物足りないかが、^{フレ}吾ながら不明である。したがって自己の想像でいい加減に作り易^カえる訳に行かない。あれに嫉^{シット}妒を加えたら、どうだろう。嫉^{シット}妒では不安の感が多過ぎる。憎悪はどうだろう。憎悪は烈げし過ぎる。怒？ 怒では全然調和を破る。

^{ウラミ}恨？ 恨でも春^{シュンコン}恨とか云う、詩的のものならば格別、ただの恨では余り俗である。いろいろに考えた末、しまいにようやくこれだと気がついた。多くある情緒のうちで、^{アフ}憐れと云う字のあるのを忘れていた。憐れは神の知らぬ^{ジョウ}情で、しかも神にもっとも近き人間の情である。御那美さんの表情のうちにはこの^{アフ}憐れの念が少しもあらわれておらぬ。そこが物足らぬのである。ある^{トツサ}咄嗟の衝動で、この情があ^{ヒウ}の女の眉宇にひらめいた瞬時に、わが画は成就するであろう。しかし——いつそれが見られるか解らない。

あ^{ウスワライ}の女の顔に普段充満しているものは、人を馬鹿にする^{ウスワライ}微笑と、勝とう、勝とうと焦る八の字のみである。あれだけでは、とても物にならない。

がさがさがりと足音がする。胸裏の図案は三分二で崩れた。見ると、^{ツツンデ}筒袖を着た男が、背へ薪を載せて、熊笹のなかを観海寺の方へわたってくる。隣りの山からおりて来たのだろう。

「よい御天気で」と手拭^{テヌグイ}をとって挨拶する。腰^{カガ}を屈める途端に、三尺帯に落^{ナタ}した鉞の刃がぴかりと光った。四十^{ガッコウ}恰好の逞^{タクマ}しい男である。どこかで見たようだ。男は旧知のように^{ナレナレ}馴々しい。

「^{ダンナ}旦那も画^{オカ}を御描きなさるか」余の絵の具箱は開けてあった。

「ああ。この池でも画^カこうと思って来て見たが、^{サミ}淋しい所だね。誰も通らない」

「はあい。まことに山の中で……旦那あ、峠で御降られなさって、さぞ御困りでござんしたろ」

「え？ うん御前はあの時の馬子^{マゴ}さんだね」

「はあい。こうやって薪^{タキギ}を切っては城下へ持って出ます」と源兵衛は荷^{オロ}を卸して、その上へ腰をかける。煙草入^{タバコイレ}を出す。古いものだ。

紙^{カワ}だか革^カだか分らない。余は寸燐^{マツチ}を借^カしてやる。

「あんな所を毎日越すなあ大変だね」

「なあに、馴れていますから——それに毎日越しません。三日に一返、ことによると四日目くらいになります」

「四日^{ベン}に一返でも御免だ」

「アハハハハ。馬が不憫^{フビン}ですから四日目くらいにして置きます」

「そりゃあ、どうも。自分より馬の方が大事なんだね。ハハハハ」

「それほどでもないんで……」

「時にこの池はよほど古いもんだね。全体いつ頃からあるんだい」

「昔からありますよ」

「昔から？ どのくらい昔から？」

「なんでもよっぽど古い昔から」

「よっぽど古い昔しからか。なるほど」

「なんでも昔し、志保田^{シホダ}の嬢様が、身を投げた時分からありますよ」

「志保田^{ユバ}って、あの温泉場^{ユバ}のかい」

「はあい」

「御嬢さんが身を投げたって、現に達者でいるじゃないか」

「いんにえ。あの嬢さまじゃない。ずっと昔の嬢様が」

「ずっと昔の嬢様。いつ頃かね、それは」

「なんでも、よほど昔しの嬢様で……」

「その昔の嬢様が、どうしてまた身を投げたんだい」

「その嬢様は、やはり今の嬢様のように美しい嬢様であったそうながな、旦那様」

「うん」

「すると、ある日、一人の梵論字ボロンジが来て……」 ※梵論字＝半僧半俗の物乞いの一種、ぼろぼろ

「梵論字と云うと虚無僧コモソウの事かい」 ※虚無僧＝尺八を吹いて物ごいをする僧

「はあい。あの尺八を吹く梵論字の事でございます。その梵論字が志保田ショウヤの庄屋トウリュウへ逗留しているうちに、その美しい嬢様が、その梵論字を見染めて——因果と申しますか、どうしてもいっしょになりたいと云うて、泣きました」

「泣きました。ふうん」

「ところが庄屋どのが、聞き入れません。梵論字は簪ムコにはならんと云うて。とうとう追い出しました」

「その虚無僧コモソウをかい」

「はあい。そこで嬢様が、梵論字のあとを追うてここまで来て、——あの向うに見える松の所から、身を投げて、——とうとう、えらい騒ぎになりました。その時何でも

一枚の鏡を持っていたとか申し伝えておりますよ。それでこの池を今でも鏡が池と申しまする」

「へええ。じゃ、もう身を投げたものがあるんだね」

「まことに怪しからん事でござんす」

「何代くらい前の事かい。それは」

「なんでもよっぽど昔の事でござんすそうな。それから——これはここ限りの話だが、旦那さん」

「何だい」

「あの志保田の家には、代々^{キチガイ}気狂が出来ます」

「へええ」

「全く祟りでござんす。今の嬢様も、近頃は少し変だ云うて、皆が^{ハヤ}囃します」

「ハハハハそんな事はなかりう」

「ござんせんかな。しかしあの御袋様がやはり少し変でな」

「うちにいるのかい」

「いいえ、去年亡くなりました」

「ふん」と余は煙草の吸殻から細い煙の立つのを見て、口を閉じた。源兵衛は薪を背にして去る。

画をかきに来て、こんな事を考えたり、こんな話しを聴くばかりでは、何日かかっても一枚も出来っこない。せっかく絵の具箱まで持ち出した以上、今日は義理にも^{シタエ}下絵

をとって行こう。幸、向側の景色は、あれなりで略纏まっている。あすこでも申し訳にちょっと描こう。

一丈余りの蒼黒い岩が、真直に池の底から突き出して、濃き水の折れ曲る角に、嗟々と構える右側には、例の熊笹が断崖の上から水際まで、一寸の隙間なく叢生している。上には三抱ほどの大きな松が、若蔦にからまれた幹を、斜めに振って、半分以上水の面へ乗り出している。鏡を懐にした女は、あの岩の上からでも飛んだものだろう。

三脚几に尻を据えて、面画に入るべき材料を見渡す。松と、笹と、岩と水であるが、さて水はどこでとめてよいか分らぬ。岩の高さが一丈あれば、影も一丈ある。熊笹は、水際でとまらずに、水の中まで茂り込んでいるかと怪まるるくらい、鮮やかに水底まで写っている。松に至っては空に聳ゆる高さが、見上げられるだけ、影もまたすこぶる細長い。眼に写っただけの寸法ではどうてい取りがつかない。一層の事、実物をやめて影だけ描くのも一興だろう。水をかいて、水の中の影をかいて、そうして、これが画だと人に見せたら驚ろくだろう。しかしただ驚ろかせるだけではつまらない。なるほど画になっていると驚かせなければつまらない。どう工夫をしたものだろうと、一心に池の面を見詰める。

奇体なもので、影だけ眺めていてはいっこう画にならん。実物と見比べて工夫がして見たくなる。余は水面から眸を転じて、そろりそろりと上の方へ視線を移して行く。一丈の巖を、影の先から、水際の継目まで眺めて、継目から次第に水の上に出る。潤沢の気合から、皴皴の模様を逐一吟味してだんだんと登って行く。ようやく登り詰め

て、余の^{ソウガン}双眼が今危^{キガン}巖の頂きに達したるとき、余は蛇に睨まれた^{ヒキ}臺のごとく、はたりと^{エフデ}画筆を取り落した。 ※皴皴=しわしわ

緑りの枝を通す夕日を背に、暮れんとする晩春の蒼黒く巖頭を彩どる中に、楚然として織り出されたる女の顔は、——^{カカ}花下に余を驚かし、まぼろしに余を驚ろかし、振袖に余を驚かし、風呂場に余を驚かしたる女の顔である。

余が視線は、蒼白き女の顔の^{マンナカ}真中にぐさと釘付けにされたぎり動かない。女もしなやかなる^{タイク}体^ノ軀を伸せるだけ伸して、高い^{イワオ}巖の上に一指も動かさずに立っている。この^{イッセツナ}一刹那！

余は覚えず飛び上った。女はひらりと身をひねる。帯の間に椿の花の如く赤いものが、ちらついたと思ったら、すでに向うへ飛び下りた。

夕日は^{ジュショウ}樹梢を掠めて、^{カス}幽かに^{カス}松の幹を染むる。熊笹はいよいよ青い。

また驚かされた。